

1それは、物語の始まり

それは、この魔法やら魔物やらがいる世界ではなんともありきたりの出会いだった。
傷ついた女の子を助ける。手を差し伸べる。
ケチがつくほど使い古された図式。
探索者の女性・ケイが林道で出会ったのはそんな図式を描く片方、傷ついた少女だった。
頭からは角が生えて、背中には黒い蝙蝠のような翼。
お尻のあたりで見え隠れするのは黒い矢印状の尻尾だ。
それらは俗にいう魔族という種族の特徴。
魔王に仕えているだの、人の魂を奪うだのよくない噂がまことしやかにヒトのあいだで囁かれて
いる存在。
それでもケイは、この魔族の少女とありきたりな図式を描く。
「大丈夫ですか？」
警戒を解くように、ケイは努めて笑顔で魔族少女に手を伸ばす。
「たす……けて……」
「ええ、助けます」
古臭い図式のように助けを求める魔族の少女。
その声に応えるように、ケイもまた古臭い図式をなぞる。
ケイはただ、傷ついた少女を抱いて、それを追ってきたものを見た。
そいつは白い毛並みの狼だった。
ただし、その本来瞳が存在する部分には刃で裂かれたような裂傷が横一文字に刻まれて、眼窩
すらも覆い隠す。
そんな視界などなさそうな白い獣はしかし確かに、こちらを向いて牙を剥いていた。
ケイは腰の武器である短剣に手をかけて臨戦態勢。
狼も鋭い牙の間から涎を垂らしてふしゅるふしゅると獲物を前にした獣の呻きをあげる。
先に仕掛けたのは狼だ。
後ろ脚で地を蹴って、獐猛な爪でケイを引き裂こうとする。
それに合わせてケイも短剣を抜き、勢いのまま爪とぶつめた。
「くう」
「ぐるるる！」
狼の爪の方が押し込む力が強い。
徐々に徐々に短剣を通して狼に押し込まれていくケイ。
やがて短剣の刃に亀裂が入り、それはピシピシと端から端を駆け抜けた。
横に走った亀裂が、ケイの短剣を2つに折った。
同時に障害物を失った狼の爪が、ケイの心臓を引き裂いた。
「があっ！」
飛び散る鮮血。
仰向けに地面に落ちる身体。
視界に先の魔族少女を見て、かっこつけといてこのざまかと、ケイは自嘲の笑みを浮かべた。
なぜか少女は、自分のために泣いてくれているように見えた。
自分も見ず知らずのこの少女を助けるようなおせっかいならやったが、泣くほどの仲でもない
でしょう。
そんなどうでもいい考えがよぎる。
身体から力が抜けていく。
意外と終わりってあっけないものだな、と意識を手放そうとした時だった。
「！？」
なにかがケイの胸奥、芯に入り込んでくる。
それは、ただ真っ黒で、しかしどこか暖かな闇。
瀕死のケイの身体を、真っ黒な闇が包み込んだ。
やがて闇は人の形となり、ゆっくりと起き上がる。
それを白き狼は警戒する様子で見ている。
得体のしれない獣も、得体のしれない出来事にはうかつに手出しできないようだ。
やがて人の形をした闇が部分的に剥がれて、そこからケイの瞳が顔を出す。
腕には折れた短剣の代わりに黒い、闇色の長剣。
その長剣はまるで長年連れ添った相棒かのようにケイの手に馴染んだ。
「ぐるるるあ！」
狼もいつまでも怯んではいけないのか、また飛びつきからの切り裂きを試みる。
しかしそれは、ケイが操る黒剣に容易く遮られた。
「これは……」
白き狼の一撃さえも押し返せる力。
黒剣は武器というだけでなく、ケイの身体全体に力を与えているようでもあった。
「ぐるるる……」
現状の力の差を理解してか、狼は後ろに飛びのく。
さらには踵を返してケイに背を向けた。

そしてこれ以上闘争はしないとばかりに前脚も後脚も使って逃走を開始した。
「あれはいったい……」
狼の正体が気にはなるが、ケイの当初の目的は狼を追い詰めることではない。
傷ついた魔族少女を救うことが目的だ。
魔族少女を襲う外敵である白き狼は追い払った。
しかし肝心のその少女の姿が見えない。
「どこにいったんでしょう？」　というか、これ戻れるんですかね。ちょっと恥ずかしい」
戦闘中には気にならなかったが、ほとんどのカラーリングを黒で埋められた服装は、日常生活を送る分には恥ずかしい。
戻れるなら普段していた軽装に戻りたいものだと思ってしまう。
——あたしはここよ——
ケイの心の中で、あの魔族少女の声がした。
しかしそれは先ほどまで見せた弱弱しい声ではなく凜とした力強いもの。
「え？」
困惑するケイをよそに、ケイ自身の胸から黒い水晶球のようなものが浮かび上がる。
「な、なんですかこれ？」
ケイの前で、水晶球は形を変えて、先の少女の輪郭を。次に姿を現した。
ふう、と息を吐いて、少女の姿に形を変えた水晶球は言った。
「あたしはアマリー、よろしくね、探索者さん」
「ええ～……」
どうにも理解が追い付かないが、話は聞くしかなさそうだ。
ケイはアマリーと名乗る少女から差し出された手を、友好を示すために握った。

探索者たちが拠点にする村。その中の宿屋。
ケイは宿屋のチェックインを済ませるとベッドに腰かけて、向かいのベッドに腰掛けるアマリーという魔族少女とお互い話あった。
「なんであんなところにいたんですか？　あそこは魔物除けの結界の範囲外で、私たち探索者でもなければ危ないですよ」
この世界には人に害を及ぼす危険生命・魔物が存在する。
幸い、人の生活圏には彼らの邪悪さに反応して拒絶する魔物除けの結界が張られているがその外を出れば当然襲い掛かってくる。
その魔物の脅威に晒されても外の世界のものに触れたいものたち、探索者と呼ばれるヒトくらいしか結界の外には出ないものだ。
魔族という種族がどれほどのものかは知らないが、まだ幼い外見のアマリーには危険すぎる。
よっぽどのなにかがあるのかとケイが考えるのも無理はない話だった。
ただ、この先アマリーの口から語られたのはどうも突拍子もないことばかり。
「ちょっと魔王ザーゾ様の命でね。」　精霊の心臓”を扱えるものを見つけてこいって」
「魔王……？　精霊の心臓？」
精霊こそこの魔法世界で暮らす人々なら日常的に馴染みがあるものだが、その心臓だの魔王だのはわけのわからない言葉の羅列だ。
ケイが言われた単語を鏡のように返すのも無理はない。
「うーん、あなたバカそうだし、必要なことだけ言うわ」
「バカ……」
ほぼ初対面なのにバカ呼ばわりは心外だが、実際ケイは魔法の知識には疎い。
おそらくその発展形である羅列された単語は理解できなそうだ。
「あなたは魔王の”心臓”であるあたしの力を扱える。だから助けてほしい」
「……なるほど、わかりました！」
「え、本当に……？」
アマリーもさすがにふたつ返事が返ってくるとは思わなかったのか、警戒の顔色を示す。
そもそもの頭の悪そうな人間が単語の意味を雰囲気だけで察したでもしたというのだろうか。
ケイはそんな思案を巡らせるアマリーの眼をまっすぐに見て力強く口を開いた。
「難しいことはわかりません。でも、あなたは、アマリーは助けて欲しいと言った。だから助けます！」
あまりにもまっすぐすぎるケイの宣言。
少し虫が良すぎて怖いとアマリーは内心想った。
こんなに気づけず知らずのヒトの助けになることを即断できるのが、人間という種族なのだろうか？
ただ、助けてくれると言っているのだ。それに甘んじるしかない。
目的を達成するには結局、この得体の知れない人間の力を借りる他ないのだから。
「じゃあ、これからよろしく。えっと……」
そういえば名乗っていませんでしたと、ケイは自分の名を口にした。
「私はケイ。ケイ・ネルソンです」
「改めて、あたしはアマリーよろしくね」

ケイとアマリーはこれからの同行者として、固く握手を交わした。

宿屋を後にして村の中を進むケイとアマリー。

村の様子が珍しいのか、アマリーはきょろきょろと周囲を眺めている。

さすがに耳の角やら羽根やらは見られたらまずいとケイは思うが、誰もアマリーの風貌を気にする様子はない。

村の生活は平穩そのもの。

薪には火の魔法がくべられ、それを囲って大人たちが焼いた肉を食う。

木でできた桶には水の魔法が注がれ、それを使って子供たちがじゃぶじゃぶと音を立てて服の洗濯をしている。

親の家事仕事の手伝いだろうか。

ただ、こんな平穩な暮らしも魔物をはじく結界の中だからできること。

結界からひとたび出れば、そこでは様々な魔物が探索者に牙を剥く。

「そういえばアマリー、これからどこへ向かうんです」

「ええと、精霊を信仰している都市とか、ない？」

「ああ、それなら水の精霊都市が近かったはずですよ。確か」

がさごそと、ケイは懷から地図を取り出し、広げて見せた。

現在の村からひとつ先の集落を指さし、そこが水の精霊を信仰する都市だと、アマリーに告げた。

「じゃあ、まずはそこで」

「そういえば精霊の心臓なんていってましたね」

「そう、あたしが魔王ザーゾ様から与えられた指令は、精霊の心臓を集めること」

「その心臓っていうのは、なにかの魔法具ですか？」

「……まあ、そんなものね。この世の精霊が持っている強大な力を持った魔法具」

「じゃあ、この旅の目的はそんなすごい魔法具を集めることなんですね」

「そう、そのためにはえらい精霊様に認めてもらわないとね」

「ところでアマリー？」

深刻な顔でケイがアマリーに詰め寄る。

なにごとかと、アマリーも少し引き気味だ。

「その偉い精霊って何人いるんですって？」

「……」

そこからか、とアマリーは内心突っ込みずにはいらなかった。

しかしこの魔法の知識に疎い通りこして疎すぎる女はなんだか全部つつこんでも疲れるだけな予感がした。

だから、常識的な知識でも丁寧に共有してやる。

「まず炎・水・地・風、次に光と闇、最後に呪いと時空の精霊がいるわ」

「ほへー。八人もそんな偉いヒトがいるんですねー」

間抜け顔を晒して常識を得たケイに、アマリーは頭が痛くなった。

そもそも精霊はヒトじゃない、とつつこみを入れたいが、連鎖しそうなのでぐっところえる。

今は偉いやつが八人いる、くらしい認識でいいのだ。

とはいえ、その偉いやつ八人に会うのがとても困難な道ではあるのだが。

ケイとアマリーは村を出て街道沿いへ。

アマリーも白狼の件もあって周囲を警戒するが、魔物の気配はあたりに見えない。

ケイは地図を見ながらスタスタと整備された街道の左側を歩く。

街道は左側通行。それは旅人の間のマナーでもあった。

アマリーは遅れないように、小さな歩幅で精いっぱいケイについていく。

アマリー自身もそれなりに魔法の腕に自信はある方ではあるが、やはり探索の勝手を知る人間・ケイと離れるのは心細い。

「ちょっと、魔物が襲ってきたらどうすんの？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。魔物除けの結界は、整備された街道にもかかっているんで」

「あ、ああそうなの」

どうやらケイの魔法知識と同じく、アマリーもこの世の知識に疎かったようだ。

魔法以外の現代知識はおそらくケイの方が豊富に持っているだろう。

しばらく進むと前方に人影。

大仰な袋を持ったその緑髪でショートヘアの、人間ならば見た目二十前後の女性は旅の商人のようだ。

こちらに気づいたのか、にこやかな笑顔で近づいてくる。営業スマイルというものだろうか。

どうにもうさんくさい。

「どーもー、売ります買いません、マート・エラメクおねーちゃんのお店だよ！」

「間に合ってまーす」

「ああ、ちょっと！」

どうにもこのマートという女性にうさんくささを感じる。

ケイとアマリーは彼女をやりすごそうと、街道の左端に詰めながら前へと進む。

しかしどうしても商品を買って欲しいのか、ケイたちから見て右から左にスライドして、道を塞いできた。

「あの一、急いでるんですけど」

「まあまあ、急いでる時こそ備えておくべきだよ。ほら、この旅のガイドとかどう？　あたしのサイン入り」

マートが押し付けてきたのは明らかに急いでる時に不要そうな観光（？）の本。

しかも商人がサインしてなにか付加価値があるのだろうか。

「ケイ、もう払って通っちゃえば？　なにか買うまでつき纏いされそうだし」

こそこそとアマリーがケイに耳打ちをする。

すでにここまでのやりとりで面倒になってきたようだ。

ケイもめんどくさいという思いはある。

「いくらになりますか？」

「はあい、王女の紙幣一枚分になりまあす」

「たっか！」

王女の紙幣と等価の本など、なにか有用な魔術の教科書くらいなものだ。

この商人が押し付けようとするよくわからない観光の本に、それと同価値があるとは思えない。

「じゃあ、このかさばる手甲とか買う？　王の紙幣五十枚分」

「それはそれで法外じゃないですか……」

王の紙幣は王女の紙幣の二倍の価値。それが五十枚。

つまりは先の割高の本の百倍。

「あれ？　そう考えると本は安い気がしてきた。お金ってなあに、そらってなあに……」

先に出したものより圧倒的に大きな金額を見せつけられ、ケイの判断基準と財布のひもが揺らぐ。

揺らいだひもは導かれるままに開かれて、王女の紙幣がほとんど詐欺師な商人に吸い込まれていった。

「毎度あり～」

物が売れたことに満足したのか、マートは街道の右側にズレて、ケイたちが来た方角へと進んでいった。

ぐるぐるぐると、ケイの中でなにかが回る。

放心状態に近いケイの顔前で、アマリーがパンツ、と両手をはたき合わせた。

「はっ！」

「大丈夫？」

「アマリー」

「なに？」

シリアスな顔で、ケイがアマリーを覗き込む。

ただこういう時は大抵ろくでもない言葉が吐き出されると、今までのやりとりでアマリーは学んでいた。

「私、もしかして騙されたのでは？」

「もしかしくなくても、騙されたと思う」

ほんとうにろくでもないな一と、思いながらアマリーが前を見るとそこには街の高い門が広がっていた。

それは水の精霊・ウンディーネを信仰する都市・マリントウンの入り口だった。